

やすいことも知られている。

先述のキュウリの白変葉も、Kの過剰ばかりでなく、薬剤消毒したハウスに多く、問題となつた。調査してみると、消毒の結果硝化菌も少くなり、Nがアンモニアのまま土中にとどまるため、Mgの吸収を阻害していることがわかつた。Mg欠乏症に

は至らないまでも、野菜類はアンモニアが多いと生育の悪いものが大部分なので、生育の面からも安心はできない。いずれの場合も、薬剤消毒後、無病の完熟堆肥を数百kg散布すれば微生物は復活するので、薬剤消毒の場合の常識として利用したい技術である。

エダマメ新品種「キタノスズ」 ——特性と栽培の要点——

雪印種苗(株)千葉研究農場

七 沢 和 洋

1 はじめに

エダマメはビールのつまみなどとして、昔から栽培、利用されてきましたが、畑の地力維持に有利なことから輪作体系の一環として組み込まれ、近年は稻作転換事業の拡大によって作付面積も増加し、産地の形成も進んできました。作型も露地がまだまだ過半数を占めていますが、産地間の競合を避けるためハウス・トンネルを用いた作型に移行している産地もあり、最近はこれらの作型に適応する品種の育成も行われています。

エダマメの品種に望まれる特性として、①早生、②濃緑の大莢、③毛は白色、④2粒以上の上物莢が多い、⑤味が良いことなどがあげられます。弊社でも以上の点を目標に品種改良を行い、「サッポロミドリ」、「ユキムスメ」などを育成、発表し、各地で好評をいただいておりますが、このたび、白毛で秀品率の高い新品種「キタノスズ」を育成し、新種苗法に基づく品種登録もなされましたので、以下「キタノスズ」の特性・栽培の要点等についてご紹介いたします。

2 キタノスズの特性

本品種は母親に「トヨスズ」、父親に「白鳥」を用いた組み合わせの品種で、収量性・莢色などを

中心に選抜・育成したものです。

1) 草丈は「ユキムスメ」などの中早生種と同程度になりますが、節数・分枝数はいずれも少なめで早生種と同程度です。また、分枝の閉じた立性の品種で、密植しても倒れにくく、耐倒伏性に優れています。開花期は「ユキムスメ」などの中早生種より2~3日早く、収穫は「ユキムスメ」と同じくらいに収穫できる中早生種に属します。

花色は白色、子実は白目の淡緑色粒です。

2) 莢色は、「ユキムスメ」よりも濃い鮮緑色です。大莢ですが、やや細長くスリムな感じがします。ゆであがりの色も鮮やかで、食味も優れています。また3粒莢が多く、1粒莢、不稔莢が少ない



写真1 「キタノスズ」の立毛状況

表1 各品種の特性及び収量の比較(早熟トンネル栽培)

(昭和60年、千葉研究農場)

品種名	開花始	収穫期	主茎長	節数	分枝数	1株当たり 稔実莢数	1株当たりエダマメ収量 総収量 上物収量	上物莢率	3粒莢率
サッポロミドリ	月・日 5・13	月・日 6・24	cm 15.6	節 6.0	本 3.1	個 19.7	kg 74.9	kg 63.7	% 85.0
美園グリーン	5・13	6・24	14.9	6.7	2.8	22.0	71.6	59.9	84.0
ユキムスメ	5・13	6・24	15.4	6.6	3.3	21.8	85.4	76.1	89.2
キタノスズ	5・15	6・26	16.7	7.1	3.8	29.5	97.2	86.4	89.0

注:播種:昭和60年3月20日 施肥量 N:2.4, P₂O₅:14.4, K₂O:2.4 kg/10a

定植:昭和60年4月3日 栽植密度:条間45cm, 株間15cmの黒色2列チドリ, 1穴1本植え

ので、秀品率があがるなど優れた特性を持ってい
ます。

莢の退色は比較的遅く、「ユキムスメ」と比べて
若干収穫期間を長くとることができます。

収量性は、2粒莢以上の莢数が多いため秀品莢の
収量が多く、前述の通り密植ができるので多収が
期待できます。(表1参照)

また、従来の品種と莢の発育が少し違うので、
収穫時期の判定に十分注意して下さい。

3 栽培の要点

本品種は、開花後35~40日で収穫期を迎える中
早生種で、ビニールハウス利用の半促成栽培・ト
ンネル利用の早熟栽培での利用も可能ですが、露
地直播栽培において、その特性を最もよく發揮し
ます。(表2参照)

1) 播種及び育苗 エダマメは本来移植を嫌う
作物ですが、ビニールハウス・トンネル利用の場
合は育苗を行います。

発芽適温は20~25°Cで、促成栽培の場合には温
床による育苗が必要となります。発芽後は20°C前
後の温度で推移するように換気を行い、灌水とともに
苗の徒長を防ぐよう注意して下さい。

播種量は栽植密度によって異なりますが、10a
換算でビニールハウス15l, トンネル10l, 露地8
lが目安となります。なお播種時には、土壤病原菌
による発芽不良や立枯病の予防のために、チウラ
ム粉剤、VCT粉剤などを必ず種子に粉衣して播種
します。

表2 各品種の最適作型

	ハウス 早熟	トンネル 早熟	促成	露 早熟	地 熟	露 地	無加温 促成
サッポロミドリ	◎	◎	◎	◎	△	◎	
キタノスズ	○	○	○	○	○	○	
美園グリーン	○	○	○	○	○	○	
ユキムスメ	○	○	○	○	○	○	

◎:最適 ○:適 △:やや不適



写真2 秀品率の高い「キタノスズ」

2) 定植は早めに 定植は、育苗日数15~20日
程度の初生葉が展開したころに行います。苗が大
きくなるにつれて移植する際の断根の影響が大き
くなり、減収・低収の原因となりますので、時期
を誤らないよう注意して下さい。

栽植密度は、ハウス・トンネルでは畦幅30~45
cm, 株間12cm程度、露地栽培では畦幅45~60
cm, 株間12~15cm程度が標準ですが、「キタノ
スズ」の場合は、前述の通り、分枝が閉じた立性
のため倒伏に強く、密植に適していますので、株
間を少し狭くして単位面積当りの株数を増やし、
収量性をあげるようにします。(表3参照)

3) 施肥 施肥は、10a当り成分量で、窒素
5~10kg, リン酸10~12kg, カリ8~10kgが目
安です。

マルチを使用する作型では、追肥の手間を考え
ると、基肥を中心とした施用方法となります。例
えば、生育後半に多量に吸収される窒素・リン酸
について、基肥を施用する時に速効性と緩効性を
1:2くらいに配分して一緒に施用すれば追肥の手
間をかなり省くことができます。

「キタノスズ」は、「サッポロミドリ」や「ユキ
ムスメ」と比べると根の伸長が緩慢で、また「サッ

表3 キタノスズの栽植密度の違いによる収量の変化

(昭和58年：中央研究農場)

処理	開花始	収穫期	主茎長	主茎節数	分枝数	最下莢着節位	1株当り莢数	エダマメ量	3粒莢率
cm cm	月・日	月・日	cm	節	本	cm	個	kg/a	%
60 × 10	8.3	9.10	38.7	9.7	1.5	7.7	44.6	133.4	25.6
60 × 15	8.3	9.11	32.8	9.6	1.4	6.9	42.6	92.7	22.8
60 × 20	8.3	9.11	33.0	10.1	1.7	6.4	52.1	83.3	24.7

注) 播種日: 昭和58年5月19日

栽植本数 60cm×10cm: 16,667本/10a

60cm×15cm: 11,111本/10a

60cm×20cm: 8,333本/10a (標準)

施肥量 N:1.2, P₂O₅:15.0, K₂O:8.0 kg/10a

「ポロミドリ」のように多肥による“つるぼけ”を生ずることはないので、若干多めに施用して、初期の根の伸長を助けるようにします。また地力の弱い畑、あるいは肥料不足で初期生育が不良となつた場合は、開花期ころに速効性肥料を追肥することによって、収穫時期の肥料切れを防ぐことが必要です。

④ 管理 特にハウスやトンネルでは、温度と水分の管理によって莢着きが左右され、収量にも影響し、この2点は特に配慮が必要です。

① 温度 日中20~25°C、夜間10°C以上が適当で、特に開花期間中に30°C以上の高温や、10°C以下の低温にあると、莢着きが極端に悪くなり、低収となります。温度計を準備し、保温・換気に努め、着莢を確保します。

② 水分 ハウスやトンネル栽培では重要な点ですが、露地栽培においても水分管理が必要です。特に「キタノスズ」については、開花期以降も水きのないよう心掛けて下さい。また、転換畑のような水はけの悪い場所での栽培では、高畦にし水はけを良くするようにして下さい。エダマメは一般に湿害に弱く、湿気が多いと根の伸長・根粒菌の着生が著しく阻害され、低収あるいは収量皆無ともなりますので、圃場の選択・排水対策にはご配慮下さい。

5) 病害虫防除

① アブラムシ: ウィルス病を伝播するので、播種時・定植時にエチルチオメトン粒剤(エカチントD、ダイジストン)を土壤施用、また生育期間中にはマラソン乳剤1,000倍液等を散布します。なお、薬剤耐性虫の出現も考えられますので、散布する薬剤は2~3種類を交互に使うようにします。

② ヒメコガネ、サヤタマバエ、マメシンクイガ: MPP(バイジット)乳剤、MEP(スミチオン)

乳剤、EPN乳剤の1,000~1,500倍液を2~3回散布します。

③ ウイルス病: アブラムシが伝播するので、アブラムシの駆除を徹底します。

6) 収穫 開花期より

35~40日前後で8~9割の実入りとなった時が収穫期となります。現実には莢もぎ出荷の場合、莢が割れるほど(開花期より50~55日くらい)まで置いて収穫しているのが実情です。しかし「キタノスズ」の場合は、「ユキムスメ」の莢に置き換えて8~9割の実入りに見える時、「キタノスズ」では既に実が入り過ぎた状態となります。従って、莢がふくらまないからと、いつまでも置いておくと品質の劣化を招くばかりですので、この点には特に注意が必要です。通常、開花期から38~45日が収穫目安ですので、この点に注意して秀品の収穫を心掛けて下さい。

4 まとめ

新品種「キタノスズ」の特性と栽培の要点を簡単に紹介させていただきました。

現地試作の反響として、秀品率が高いことは一様に評価されています。ただし、莢もぎ出荷のケースにおいて、出荷の手が間に合わず、その結果単価落ちにつながった状況もあり、出荷形態に応じた品種の選定、出荷能力に応じた栽培面積の決定などが必要です。

「キタノスズ」は秀品率が高く、かつ収量もある品種で、それだけに、畑の地力や環境整備も必要とされます。水田転換畑では、経年転換畑で、かつ地力に富むこと。畑地では連作畑は避けられること。この2つを重ねて強調させていただきます。

「キタノスズ」は、昭和59年、日本種苗協会主催の原種コンクールにおいて、一等特別賞(農林大臣賞)をいただき、今春より本格的な販売・普及に入ります。個々の栽培の場で、「キタノスズ」の良さが十分發揮されることを期待し、かつお願いを申し上げます。